

令和4年度 京都市小学校道德教育研究会

活動計画

1. 活動目標

- ・ 令和9年度全国大会開催に向けての組織力・実践力の向上
- ・ コロナ禍で進める研究会活動の確立

【目標設定の理由】

本研究会は、「教科書を用いた授業のあり方」「道德の評価のあり方」を確立させ、「特別の教科 道德」の新たな目標のもと研究会活動を進めてきた。また、平成30年度には近畿大会を開催し全国に向け実践研究の成果を発信したり、令和元年度には京都市総合教育センターにて研究大会を行い、これからの道德科の授業スタイルを全市に向けて公開したりして、京都市の道德教育を牽引してきた。こうした研究会での取り組みを発信し続け、京都市の各学校では、教科書を使った道德の授業が当たり前となり、年間35時間の道德の時間も確保され、道德の評価の仕方もある程度の水準を満たすようになってきた。

一方で、教科としての道德に取り組むことに慣れ、本市教員の「道德熱」が冷めてきている状況がある。本市の取組が、教科書を使った年間35時間の授業をこなすのみで満足するようでは本当の意味での道德教科化の意味を失ってしまうことになるだろう。

そのような中、近年は新型コロナウイルス感染拡大のため、子ども達の生活に大きな制限が課せられることになった。また、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、新たな人権問題や考えるべき社会問題が出てきた。道德科ではこれらの予測不可能な社会で「人としてのより良い在り方」「自分の生き方を自分で決めていくこと」を考えることが求められてきている。また、一人一人の GIGA 端末を道德の授業でどのように活用していくかなど新たな研究課題も出てきており、京都市小学校道德教育研究会に次の使命が課せられている。

そこで、本研究会では、新たな研究課題に挑みながら、令和9年度に本市にて開催予定の全国大会を見据え、より確かな道德科の授業実践及び道德教育の充実に向けて、さらなる高みを目指した研究会活動を行うことで、本市の道德教育を牽引したいと考えた。

そのためには、新型コロナウイルス感染防止のため、たとえ研究会活動が制限されたとしても、その状況の中で自分たちにできることは何かを一人一人が考え進める研究会活動を進めていきたいと考えている。令和5年度には小学校道德教育研究会として全市に向けての研究発表大会を行いたいと考える。授業を伴った研究を復活させ、より良い道德の授業づくりに真っすぐに向かう研究活動を繋いでいきたい。また、研究会員の実践力を高め、全国大会を運営できる力量をつけることが、研究会活動のみならず、会員の所属校、さらには全市にその成果を還元していくことにつながると考え、この目標を設定した。

2. 研究組織と業務・役割

	研究部	研修部	庶務部	広報部
主な業務	授業づくりの研究 ・研究大会 ・授業力 up 研修会 教育委員会との 共催・・・年2回 ・授業研究等 各部会ごと1回 (計4回)	研修の企画・運営 ・道楽会 2～3回 ・授業力up研修会 年2回 ・新人勉強会 年3回 メンバー固定	企画・連絡・調整 ・役員会運営 ・研究大会運営 (R5年度実施に向けて) ・小教研との連携 ・フォルダ管理 ・会費の管理・運用	通信の発行 ・HP ・道徳だよりの発行 ・道徳研究会報
詳細 及び 変更点	部会は4つ 低・中・高・育部会 令和4年度は、 チームスで板書，発 問，GIGA グループに 分かれての交流。	令和4年度は ・道楽会を行う。 ・新人勉強会を行う。 ・若手向けの内容 ・道徳教育の内容 (キャリア教育)	会計係を置く ・会費運用 ・懇親会 計画運営 庶務係を置く ・会員募集・連絡 ・印刷・全市配付等 教頭・教務主任を 中心に組織する。	通信発行(取材・作 成)を複数人で分担 する。 道徳の授業実践を行 った研究会員に <u>原稿</u> <u>依頼</u> を行う。 その中で情報発信力 を付けていく。 HP の充実
指導 助言	近藤清美 副会長	小林 宏樹 副会長	桑田 佳子 副会長	綾野 美晴 副会長
相談役	居林晃一郎教頭 田渕誠人教頭 佐津高志教頭 竹中基教頭	鎌田賢二教頭 居林良和教頭 田野博文教頭 三上美香教頭	斎藤正幸教頭 内野英教教頭	佐久間寧子教頭 鎌田賢二教頭
全国 大会に 向けて つけたい おもな力	いつでも・だれでも どんな学年の授業も 公開できる力 授業分析力 指導助言力	いつでも・だれでも どんな内容でも 実践発表できる力 講師としての指導力 企画・運営力	組織運営力 事務処理力	情報収集力 情報発信力 情報をまとめる力 分かりやすく伝える力

3. 今年度のおもな活動内容

今年度については、新型コロナウイルスによる感染拡大防止を行いながら、持続可能な研究会活動の形を見つけ、確立させていく。参集、参観とオンラインでの参観、会議への参加などをうまく組み合わせ、どんな状況であっても研究活動を推し進めることができる形を作り上げていきたい。昨年度以上に「つながり」が感じられる研究活動を進めていくことで、研究会員はもとより、多くの指導者が支え合えあえるようにしていく。今まで小学校道徳教育研究会として大事に行ってきた活動を可能な形、新しい形で継続、発展させていくことができるよう、感染拡大防止に最大限配慮しながら、研究会活動を行っていくものとする。

研究主題

よりよい生き方を求め、自ら気づき、考え、行動する子の育成を目指した
「しなやかな道徳教育」
～自己の生き方についての考えを深める学習を通して～

【主題設定の理由】

本研究会では、今年度の研究主題を

『よりよい生き方を求め、自ら気づき、考え、行動する子の育成を目指した“しなやかな道徳教育”』、～自己の生き方についての考えを深める学習を通して～

として、これからの道徳教育が果たす大きな役割への期待に応えられるように、また、そのための改善の研究に取り組むことにした。

本研究会の考える“しなやかな道徳教育”とは、柔軟性があり、かつ、決して折れない心の芯がある道徳性を育てることである。この“しなやかな道徳教育”を進めるにあたっては、新学習指導要領で定められている「特別の教科 道徳」の目標に則り、道徳的諸価値についての理解を基に「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」「自己の生き方についての考えを深める」学習を行う必要がある。

これら3つの学習過程のうち、今般の新型コロナウイルス感染拡大による社会の変化や「新しい生活様式」の登場などにより、人間の生き方そのものが大きく変わろうとしていることなどを踏まえ、今年度も「自己の生き方についての考えを深める」を重点的に取り上げることにした。この「自己の生き方についての考えを深める」については、令和2年度より実施されている「生き方探究パスポート」（京都市版 キャリア・パスポート）の取組にも関連が深いものとする。

先が見えない、予測困難な社会をどのように生きていくか、自分なりにどのようにして道徳性を発揮していくのか考えることは、大人だけに限らず、未来を力強く生き抜く子どもたちにも求められている。そのような子どもたちに、道徳科及び道徳教育を通してどのような力を付けていくことができるのか、研究会活動として探究していきたいと考える。

【研究主題に基づいた各部の取組】

〔研究部〕

今年度の研究テーマ

「(道徳的価値の理解をもとに) 自己の生き方についての考えを深める授業づくり」

昨年度に引き続き、この研究テーマに沿った道徳科の授業を、会員が個人実践する。

令和4年度には 総合育成支援・低・中・高学年の四部会を設定し、授業を伴った研究部会を再開していく。より多くの研究会員が研鑽を積み、授業力を高めていけるようにする。参集が難しい時は zoom などを活用し授業を参観する。また、部会内でも小グループで交流をしながら研究を進める。記録をとりまとめ、全会員で共有、交流する。多くの実践や評価(成果と課題)を共有していくことで全会員のみならず、各学校で活用されるようにしていく。

〔研修部〕

各校における道徳教育や道徳科の授業がより充実するような題材(ネタ)を紹介し、それに則った取組を、会員が個人実践する。

自己の授業実践を発表する場をできるだけ多くの会員に経験させることで 個々の発信力等の力量を高める。道楽会、授業力 up 講座を計画的に企画運営していく。その記録をとりまとめ、全会員で共有、交流する。題材は、できるだけ研究主題に沿ったものにする。

若年教員を対象とし、「新人勉強会」を開催する。同一メンバー対象 年3回

〔庶務部〕

役員をはじめとする会員の連絡・調整にあたる。連絡は、メールが主となるが、フォルダ管理を行うことで、情報を共有しやすくすることもできる。

令和4年度は、参集とオンラインのハイブリッドで役員会の開催を行う。開催の運営に中心となってあたる。

会費の管理・運用を行う。

〔広報部〕

研究部及び研修部でとりまとめた実践記録の中からピックアップしたものを、「通信」として発行したり、授業づくりのポイントや教育技術を紹介したりする。(HP掲載)

道徳を学ぶ上で 必要な情報を提供する広報誌を作成する。

個人の実践発表等も研究会員に広報し、共有していく。